

### 3月12日（月）その144 東日本大震災 ー大里中での実践ー

週末のテレビや新聞などは、東日本大震災のことを大々的に報道していました。「のど元過ぎれば熱さを忘れる」ですね。時々ニュースを見て、大変だろうなと思うことはあっても、日々の生活の中ではなかなか考えることはありません。あれから7年経つんですね。

実はそのとき、私の子ども達は3人とも東京周辺にいました。長男は修学旅行の引率で東京ディズニーランドにいました。長女と次男は、東京で働いていました。連絡が取れるまでちょっと心配でしたが、幸い無事でした。

2011年3月11日、島尻地区の中学校は卒業式でした。大里中の校長だった私は、午前中感涙の卒業式が済んでホッと一息ついて、「この3年間に思いを馳せ、少しとうるばって（ボケッとして）いました。1・2年生は卒業式の片付けを終えて、部活動をはじめていました。

3時過ぎに突然教務主任が、「校長、東北が大変なことになっています。テレビをつけてください！」と、飛び込んできました。テレビをつけてみると、仙台空港の軽飛行機がプラモデルか何かのように津波に押し流されていました。なんか映画でも観ているような・・・家が次々に流されてがれきに変わる信じられないような光景が続いて、言葉がありませんでした。福島原発も遠くから映されて、「これはもしかしたら、1986年のソ連のチェルノブイリみたいになるのではないか？」と心配でした。

以下の対応はとても素早かったと自負しています。まず緊急に職員を集めて、今東北で起きていることを説明しました。そして部活をやっている子ども達を体育館に集めて、状況を説明し帰宅させることにしました。島尻教育事務所等からの指示を待たずに、大里中では14日の月曜日の午後、いち早く緊急生徒集会を開催しました。プレゼン等を活用し、東北を襲った巨大地震や津波の被害について生徒指導主任に説明してもらいました。私もマイクを握り、「私たちに何ができることはないのか？考えてみよう！」と呼びかけました。県教育庁から緊急集会をするよう文書が届いたのは、その週末だったと記憶しています。緊急時の初期対応は迅速でなければなりません。

各学級での道徳の授業や学年集会等も開かれました。生徒会では、「募金をしよう！」と案が出され、臨時の生徒会集会を開いて可決されました。

大里中では毎月11日を「募金の日」とし、集まったお金を市の社会福祉協議会を通して被災地に送ってもらいました。その活動は、毎月一回一年間継続されました。私も校長講話等で、被害の状況などを画像で見せたり、生徒達の活動を賞賛したりしました。450人の生徒全員が毎月一人100円をめぐりに、募金活動を行いました。一年間の募金活動で70万円くらいのお金が集まりました。私は金額よりも、生徒会が自ら決めて各学級で毎月募金を集めて、一年間継続できたことがすごいと思いました。私も毎月小銭を貯めて募金に協力しました。そして何度か新聞にも取り上げられ、県の社会福祉協議会からも表彰されました。

退職して平成27年4月に、私は南三陸町や陸前高田市などの被災地を訪れました。被災地に行くことが、復興につながると考えました。がれきは片付けられて新しい堤防や街づくりが行われ、復興が始まっていましたが、まだまだだなどと感じました。どんなに悲しんでも過去は変えられない。前へ!!

### 3月14日（水）145 「妻に捧げた1778話」－眉村卓－

先週本屋で「妻に捧げた 1778 話」（眉村卓著・まゆむらたく、新潮新書）という本を手を取った。「読め！」と私の脳がささやいた。（笑）前に単行本を見たことがあるし、確か草薙剛で映画化されたことも思いだしたからだ。

この本は作家眉村卓のノンフィクションである。余命は一年、そう宣告された妻のために、SF作家である夫はある決心をする。「笑い」でがん細胞をやっつけさせよう、妻のために毎日一話ずつ短い話を書いて読んでもらおうと考えた。病気の妻への話なので、病気や死や不倫などの話は書かないこと。日記や実体験のエッセイではなく、作家らしく外に出しても恥ずかしくない小説であること。原稿用紙3枚以上とすること。などを肝に銘じて始めたようである。私が読んだ新潮新書版には、19話のショートショートが掲載され、それについての作者の注釈などもまとめられていた。

第1話を平成9年（1997年）7月から書き始め、最終話（1778話）が平成14年（2002年）5月である。ほぼ5年間、毎日書き続けた。

二人でお寺にお参りしたとき、病気が治るように「病気平癒」と書けと言ったのに、奥さんは夫の作家としての運が長続きするようにと「文運長久」と書いたそうです。また葬儀の案内に「作家眉村卓の妻、村上悦子」と書いて欲しいと懇願したようである。眉村さんは、「ともに人生を過ごし、ずっと協力者であったことを証明したい。私の協力者であったことに妻は自負心と誇りを持っていたのだ」と語っていた。

私は草薙剛、竹内結子主演の映画も観たいと思い、日曜日にレンタルビデオを借りてきて、妻と二人で観た。老夫婦のはずなのに、30代の若者夫婦になっていたが、映画はとても感動的だった。

さてラストの1778話目は何が書いてあったと思いますか？妻が亡くなる直前には、「小説」ではなく「エッセイ」になっていることを作者も認めています。これから本を読む予定のある人は、退場して下さい。（笑）

1778話最終回　とうとう最終回になってしまいました。  
きっと迷惑していたことでしょう。  
きょうは、今のあなたなら読める書き方をします。  
（そして空白行が、3ページ近く続きます。ラスト3行は……）

いかがでしたか？  
長い間、ありがとうございました。  
また一緒に暮らしましょう。

空白の3ページは、映画ではペンが原稿用紙の上をなぞって動いていました。何が書いてあったのでしょうか。おそらく眉村さんの奥さんへの生の気持ちだったのでしょうか。二人だけの物語だったに違いありません。

新書を読み終えて、映画を見終えて、「うらやましい夫婦関係だな」と思いました。特に最後の一行「また、一緒に暮らしましょう。」は、考えさせられました。

もし私なら……我が家ではまちがいなく私が妻よりも先に逝くので、考える必要はない。でももし、……あ、あ、スペースが足りなくて書けない。（笑）

### 3月15日（木）その146 一日「二食」から「三食」になった理由

沖縄タイムスの「わらびー」3月4日号に昔の食事のことが載っていて、昔は一日二食が普通だったと書いてあった。私はずっと疑問に思っていたことがあって、方言には「あさばん」（昼飯）、「ゆうばん」（夕飯）という言葉はあるのですが、「朝飯」に相当する言葉がないのです。「し（ひ）ていみていむん」（朝の物）、「ひるまむん」（昼の物）、「ゆさんていむん」（夕方の物）という言葉はあるが、なぜ前者と表現方法が違うのか、どうも違和感がある。前者は一日二食時代の名残で、後者は後の三食時代にできた言葉ではないのか？と思います。（誰か、知っていたら教えてください。）

ネット検索をしてみると、やはり昔の日本は一日二食だったようです。平安時代の「蜻蛉（かげろう）日記」という物語の中に、食事は巳の刻（10:00～12:00）と寅の刻（16:00～18:00）、朝は軽食のおかゆがあると書かれているようです。また江戸時代の井原西鶴の「浮世草子」には、食事は朝夕の二回（午前8時頃と午後2時頃）との記述があるそうです。

一日三食が定着したのは、元禄時代（1688年～1704年）で、そのきっかけとなったことが二つあります。一つは「明暦の大火」（1657年）です。江戸時代最大級の火事で、江戸城、大名屋敷を含む市街地の大半が焼失したそうです。死者数は3万人とか10万人という記録が残っているようです。

幕府はすぐに江戸城（天守閣は作らず）や江戸の街の復興に着手します。そのため地方から大量の労働人口（独身男性）が流入します。日中の過酷な肉体労働で二食は大変きついものがありました。彼らのニーズに応えるように、江戸の町には屋台や煮売り屋が軒を連ねるようになったそうです。それまでは朝、夕の一日二食を家で取るのが基本だったのですが、労働の途中で外食をするのが当たり前になり、一日三食が一般化したというのです。

二つ目の理由です。元禄時代というのは徳川家康が戦国時代を終わらせて50年が経ち、「太平の世の中」になった頃です。戦がないので物流がよくなり、照明用の菜種油も安く出回るようになりました。その結果人間が起きている時間が長くなり、夜なべ仕事や夜遊びなどもできるようになりました。となると当然寝るのが遅くなり、働く時間も長くなるので1日2食ではもちません。そこで朝・昼・晩と3食とるようになったのだそうです。

琉球国時代の沖縄の農民たちは、琉球と薩摩の二重支配で重税を取り立てられ、自由はほとんどなく牛馬のように働かされていました。そして劣悪な衣食住を強いられ、死なない程度に生かされていたのです。

明治になって琉球処分で沖縄県が誕生すると、県庁職員、教員、警察官など、県外人が大挙してやってきて、沖縄を支配します。那覇などの商人もほとんど鹿児島県人でした。大正時代は、飢饉やソテツ地獄が何度も沖縄を襲います。そのたびに餓死者が多数出ています。そしてあの沖縄戦で多くの人が死に、焦土と化したのです。

社会や政治の課題はいろいろあるけれど、庶民レベルで考えて今の時代のような「平和で豊かな沖縄」は、この800年間の沖縄のどの時代にも存在しないのです。「足るを知る」で、私たちは三度三度の食事がただただ、ひもじい思いもしたこともない。何と有り難いことなんでしょう。